

## 「よいまち」とは？

愛媛大学法文学部准教授

佐藤亮子

旅に先駆けて、私がおもっても楽しみだったのは、「アメリカの地方のまち(rural)」に行けるということだった。アメリカには何度か訪れたことはあったが、これまでの訪問先は比較的行きやすい都市部あるいは日本人にとっても馴染みのある地名のまちがほとんど。農村部に行ったとしても、それはあくまで特定の事業者(つまり点)を訪ねることが目的であり、地域(面)としてのイメージはあまりもてなかった。今回、アメリカのウェストバージニア、オハイオ、ネブラスカの3州の約 10 のまち(+ニューヨーク)をめぐり、それぞれの地域に根ざし、地域の課題解決のために活動している人たちと交流できたことは、貴重な経験であった。

お話を聞かせていただいたすべての場所・人が非常にユニークで印象深いものであったが、私が大学の機関に勤めているということもあり、ネブラスカ大学の Rural Futures Institute(以下、RFI)を個人的にはあげたい。RFIは、学生と学部、そして地域をつなぐ組織として、2012年に創設された。案内していただいた、地域と連携して展開されている多様な活動の現場は大変興味深いものであった。特に地域イノベーターフェローの制度はぜひ真似したいと思った。

加えて感動したのは、私たち一行を、組織をあげて迎えてくださったことであった。RFIのみなさんが集まってくださったランチミーティングは、実に多くの教職員がこの活動に関わっていることがわかったし、その団結力と熱意を感じるものであった。私が所属する愛媛大学にも社会連携機構という、学長直属の機関がある。目指すところは



は共通していると思うが、さて、このような場を設定することができるだろうか、うらやましく(そして恥ずかしく)思った。機会があれば、RFIの活動をもっと詳しく聞きたいし、同僚にもぜひ聞いてもらいたい。また、こちら(愛媛大学)の取り組みについてもご紹介し、交流できたら幸いである。そのほか、プログラムのメインではなかったかもしれないが、いくつか感銘を受けたシーンがある。

最初に到着したのはウェストバージニア州チャールストン。ホテル到着後、私たちはその足で、近くの広場で行われていた「HOPS & HEAT」に参加した。アパラチア地域のクラフトビール(25種類ほどもあったろうか)の飲み比べと、チリコンカン料理を出す店(おそらく10店舗以上)の人気投票がセットになったイベントである。ビールは2、3種類いただいただけでグロッキーだったが、チリコンカンは全部試食し、投票した。しょせんチリコンカン。「辛いだけで、そんなに味は変わらないでしょ」と高を括っていたが、全部がオリジナルの味わいであり、この企画そのものにも感服した。

そして翌日の午前中に訪れたキャピトル・マーケットも興味深かった。元鉄道の車両基地だった場所と建物が、現在はアウトドア型のファーマーズマーケットとインドアの小売店・レストランの複合施設として活用されている。毎日開かれているファーマーズマーケットはめずらしい。出店している全部が農家ではなかったが、農家自身が販売している店もいくつかあった。「John Carihfield Farms & Greenhouse」はそのうちの一つ。店番をしている女性の祖父 John Carihfield 氏は鉄道で働いていたが、1953年に土地を買い、生業を農業に転換した。農業を始めた彼は仲間とファーマーズマーケットを立ち上げ、そのマーケットが2001年に現在の場所に移転したのだという。地域産業の変遷を、まさにマーケットが物語っているようで、感慨深かった。

さて、オハイオ州に移動して2日目の夜。宿泊したのは General Denver Hotel という由緒ある(古い)ホテル。コウモリや髑髏に迎えられ、チェックインを済ませたあと、ホテル内のレストランで食事をした。入った時はガラガラだった店内は、席がどんどん埋まり、あっという間にいっぱいになった。観光地ではなさそうなので、お客さんの中心は地域の人たちなのではないかと思われる。地域の食材を使った店として知られているとのことだったが、その店が地域住民で大にぎわいの光景はすばらしい。そして翌日話を聞かせてくれた商工会議所事務局長 Dessie Rogers 氏によると、低迷していたファーマーズマーケットを“改革”した際に主導的に協力してくれたのもこのホテルだったという。



最後にどうしても触れておきたいのが、ネブラスカ州ライオンズの Cosmic Films Studio や Storefront Theater を訪れた時のことである。まちなかの空き店舗に劇場の座席をつくり、道路に大型スクリーンを設置して映画を楽しむ。空き店舗を買い取り、スタジオに改造して



映画を制作する(そして主役となるネコが現在演技の訓練中である)など、常識の枠にとられない自由で伸びやかな発想と行動力に感嘆した。さらに、私たちが Cosmic Films Studio をワイワイと見学しているあいだに数名の住民の方が集まってこられて、いつの間にスタジオや撮影のことを説明してくれる。その姿が実にさりげなく、かつ楽しげなのである。規模が小さくても、どんなに田舎でも、そこに住んでいる人が自分たちの暮らしを楽しんでいる、そうできる環境・雰囲気があることこそが、「よい町」なのではないかと思わされる光景だった。

今回の行程を振り返ると、スケジュールの基幹的な部分のみならず、幹から伸びた枝やそこに繁る葉にいたるまで、よく仕組まれた、意義深い内容であったと思う。このような機会に参加させていただいたことに、心から感謝したい。

